ハタラクヒト＊ペディア　1

＜井口恭行氏＞

田中永子

はじめに

はじめまして、田中コーチングの田中永子と申します。

私はＮＬＰやコーチング、ソースなどを学び、それらのノウハウや考え方を活かしたコーチングを提供しております。

この度、新しい企画といたしまして、おもに愛知県名古屋市、刈谷市を中心にお仕事をしていらっしゃる経営者の方々や企業や組織の幹部の方々へのインタビュー企画をスタートいたしました。

この企画を始めようと思った趣旨は、将来の先行きが見えづらい現代社会において、第一線でバリバリと働いていらっしゃる現役の経営者の方々、企業幹部の方々が、今何を考えているかということに興味を持ったこと。そして、その考え方に基づいてどんなアクションを起こしていらっしゃるのだろうと思ったことにあります。

また、こうした第一線でご活躍の方々のさまざまな角度からのメッセージを他の多くの実業家の方々と共有したいと思ったことも大きなモチベーションとなっています。

その他、高校生や大学生の方、これから社会に入っていこうとする方にも読みやすいように心配りをしておりますので、ぜひご愛読をいただけましたら幸いです。

個人的な考えではありますが、愛知県はモノづくりの聖地であると考えております。このモノづくりの聖地である愛知県にあって、日夜、しのぎを削っていらっしゃる多くの企業人、組織人の生の声をお届けしたいと思っております。

よって、このサイトの大きな特徴として、インタビュー形式のログをそのまま読者のみなさまにお届けするというスタイルを取っています。インタビューさせていただく私と、インタビューを受けてくださる方の真剣勝負。行間の中に潜む間も大切なメッセージだと考えております。

歎異抄とともに　･･･ロックな葬儀屋さん　井口恭行氏

記念すべき第一回は、有限会社　花正の井口恭行さんです。

井口さんは、刈谷市商工会議所に在籍され、
有限会社　花正にて、おもに葬祭業、生花業などのサービスを提供なさっています。
今日は“人の生き死に”葬式などについてお話を伺ってみました。

井口恭行氏

有限会社　花正
おもに葬儀のサービスを提供しており、会社のモットーは、“和を以って尊しと為す”に。
趣味は音楽おもにバンド活動をして過ごす。
好きな本の作者は、梅原　猛。
好きな音楽は黒人音楽やルーツミュージック、ロックなど。

連絡先：有限会社　花正
電話番号：0566-21-1005
URL www.87show.jp
メール：hanashow@aioros.ocn.ne.jp

◆日本を覆う「ひずみ」

井口恭行さん（以下、敬称略）：　今、日本には「ひずみ」があると感じています。

田中永子（以下、田中）：　ひずみとおっしゃると？

井口：　ひずみっていうのは、教育と就労、そういった問題は根本的に幼児体験だとか、幼児教育とか、子供の頃に経験することなのですが、それらがものすごく大きく作用しているのではないかと感じていますね。

田中：　詳しく教えていただけますか？

井口：　ぼくもそう偉そうにいえるほどの人生歩んでないので、あれなんですけど。それはもの凄く感じますね。教育大事だなって。今学校とかでも「道徳」だとか全然ないですし。道徳取り入れた教育をしようという動きが出てるみたいですけどね。非常にね、必要なものじゃないかと。

田中：　本当におっしゃる通りだと思います。

井口：　結局、働くにしても、勉強するにしても心の作用として、働きかけがないとやっぱ動かないんだろうと思います。それがないから 「何のためにぼくは勉強するんだろう？　何のためにぼくは働くの？　ぼく、これ、したいの？」と迷う。本人自身がそれをしたいのか、したくないのかどっちかわかんない。でもなんかやっている。

それお金のためだから、いい学校いかないといいところに就職できないから。それってなんか違うんですよ。本質とは違う。何かに動かされてる。自分で動いてるんじゃなくて、動かされてるというかね。

田中：　ええ。

井口さん：　動かされてるから、おかしなことになってるんだろうと。

田中：　そこで、ひずみができてるんですよね。

井口：　そう。悪循環のスパイラルの中でみんな動いているから、結局おかしなことになってる。だから突然キレたりもするし、自分が何のために存在して、何のために生きてるのかがわからないんだろうと。

そういう中で、働いたりしてるから、段々とおかしなことになってくる。やっぱり、そこには道徳といっていいのかわからないけど、やっぱり心というか。こう寄り掛かるものであったり、自分を律するためのなにか大事なものであったりを、知っていないとだめなんだろうな……なんてことを凄く感じていますね。

田中：　ええ

・・・・・・・

　つづく　^^

◆絵本から始まった読書の世界

井口：　つまり、自分の中に軸となるものができてないことが多いように感じます。ぼく自身もそういう人生歩んできたので、余計に感じるのかも知れません。結局、勉強もそんなにできなかったし、軸のない人生を歩んできたわけですが、だけれども、ちょっと何かの本を読むことで何かを考えさせられることがあったりとか。そういうことがあるわけですね。

田中：　素晴らしい。

井口：　ぼく誉められた人生歩んできてないんだけど。学生時代とかずっと、あんまり本も読まなくてね。本当に勉強もしなくって（笑）

田中：　（笑）

井口：　子どもが生まれた時に、どう向き合っていいか、わかんなかったんですよ。

田中：　ええ、ええ。

井口：　子どもが生れるという事に直面した時に、向きあった時に「俺、勉強なんて教えてやれないし、この子に教えてあげられることって何があるんだろうか？」って思ってね。その時、「何もないな」と思ったわけです。で、次の瞬間、「どうしよう？？」って焦ったわけです。すると、その時に、たまたま友達からもらった絵本が目についた。「五味太郎」の絵本だったんですけどね。

田中：　誰もが一度は読んだことがある有名な絵本作家さんですね。

井口：　そう。でね、「あ、絵本の読み聞かせだったらできるわ」って。で、子どもに読み聞かせしてあげたんですよ。そうすると、子どもが喜んで喜んで……。「もっと、もっと」ってね。同じ単純な絵本を、ほとんど絵ばっかりの本を、言葉が２～３行の絵本を「何回でも読め、何回でも読め」って。それこそ「１０回でも２０回でも」って繰り返し読ませられる。こっちは「もう、いいだろ。いいかげんにしろよ」って思いながら。で、はっと思ってね。「これかぁ！」と思って。本なんて自分が興味を持って、それを繰り返しやるっていうのは、自分の身になるってこういうことなんだなって。

田中：　まさに。まさに。

井口：　その時に気づいて。「あ、これは！」って思った時に、自分でどんどん絵本を買ってき

て読んで。結局、自分が絵本を集めるのが趣味になったり、そこからいろいろ本を読むようになって、夫婦喧嘩すると本読んだりとかね（笑）

田中：　（笑）

井口：　俺が悪いのか、あいつが悪いのか？　どっちだ？　クソって感じでまた本読んだり（笑）

田中：　（笑）

井口：　どっかに自分の欠点とかを見出したり、そんな自分を慰めるためだったり（笑）　いろいろな怒りをしずめるためだとか。それが自分の中では非常によかったかな、と。今にして思えばね。

田中：　そうですね。

井口：　絵本ってあれ本当は大人が読むべきなんですよ。実は。ぼくも初めてそれを子どもに教えてもらって。読み始めて、集め始めて気づいたんですが、素晴らしいなぁと思って。本の持つ世界って。本当に屈託がなくって、もちろん現実的でないことだって、いっぱいあるんだけども、それはどうでもよくて。

田中：　ええ。

井口：　それは自分の心のあり方だったり、その時の嬉しいって表現だったりね。悲しかったり、腹が立ったりというのだって、もちろん人間だからこその感情で。人間は感情の動物なので、いろんなことが起こるんだけど、その時、本という存在が叱ってくれたり、慰めてくれたりだとか、友達になってくれる。自分の中でも、もの凄くそれが大きく働いたわけです。

田中：　そんな井口さんのお勧めの本はなんですか？

井口：　やはり日本の作家さんの話っていうのは凄くいいですね。ぼく、ビジュアル的にはヨーロッパの絵本も大好きなんですけどね。やっぱり色使いがもの凄く繊細というか、もうほんと。

田中：　繊細ですよね。

井口：　そう！　繊細なんです。とても好きなんですよ。微妙な色合というか。だけど、お話

はやっぱり日本の話の方が好きですね。それこそ「五味太郎」や「荒井良二」辺りが大好きですし。昔の人だったら、「浜田広介」とか「宮沢賢治」とか。宮沢賢治も本当に好きなんです。浜田広介の「泣いた赤鬼」とかね。

田中：　私は「100万回生 きたねこ」が好きですね～。

井口：　ああ、「佐野洋子」さんね。うん、うん。

田中：　あの本がいまだにとってあって。

井口：　うちもありますね。

田中：　あれは、読むたびに浄化してくれる気がして。

井口：そうね。

田中：　子どもに読ませるために買ったんですけど。

井口：　うん。違うんですよね。そう。

田中：　絵本は。子どもって感覚のかたまりだと思うんで。

井口：　うんうん。

田中：　そこに働きかけるものは、ほんと無垢なものでないと響かないと思うんですよね。それが凝縮されたものかなと思って。

井口：　確かに。「１００万回生きたねこ」って凄くいい話だしね。

・・・・・・　つづく　^^

◆子どもとの接し方

田中：　子どもさんはおふたりですか？

井口：　いいえ、三人なんです。

田中：　で、大学一年生の方と。

井口：　真ん中が今度四月から中学三年なんで。高校受験（笑）

田中：　あはははは。

井口：　お金ばっかり、かかっちゃうね（笑）

田中：　で、一番下の方が小学校卒業されて。

井口：　今度中学一年なんです。

田中：　節目ですね、みんな。

井口：　本当、重なるんですね。だから小学校は１２年通いましたね。一番上から６つ違うんでね。

田中：　そうかぁ。

井口：　そうね。自分で言うのもなんだけど、面倒見た方だと思って。子どもは。

田中：　うん。本当にちゃんとお子さんに向きあって。

井口：　うん。自営業だからできたのかなっていうのもありますね。暇な時はほんと暇なんで。そういう時は子どものことできたし。

田中：　でも、いくらお時間があっても、そういう気がない方は、しないと思いますよ。

井口：　サラリーマンさんとか、そういう人たちはなかなか難しいでしょうね。子どもが寝ている時に帰って、朝まだ寝てるうちに仕事行って。そういう人もいるみたいだからね。

田中：　絵本見ながら、何を作っていた感じでしょうね？　井口さんの中で。

井口：　作っていた？……。う～ん、作っていたものは特にないです。ただ単に、子どもと思い出を作ろうって、それだけだったんで。どうせ、そのうち父親のこと嫌いになって出ていくだろうって思ってたから（笑）。だから、父親がスキンシップできる間は思い出を作って、遊園地に連れてったり動物園連れて行ったり、何でも思い出作りができればいいな、と。そう接してきただけなんでね。

まぁ、特に「こうあるべし」ってこともないし、自分の人生のこともね。まぁ、そんな立派な生き方もしてないから、自分も（笑）。でも、おかげさまで、自分でもさっきのように接したあれで、そんなに嫌われずに、今のところね、風呂先に入ったら嫌がられるとか、洗濯物一緒にしたら嫌がられるとか……。食べた箸で、こう食べたら嫌だ、とか一切ないんで。結構、娘がアイスクリーム食べてて「食べる？」とかやってくれるんで、そんなに嫌じゃないんだ～って思ったりして。

田中：　なんか、とてもいい距離感な気がしますね。

井口：　そうだね。かといって、ベタベタしてるわけでもないし。今、真ん中の娘が反抗期で「くそじじい」とか言われたりしてますね（笑）

田中：　反抗期、ありますよね。

井口：　それは自然なものでね。成長してるのかなって。

田中：　そうですね。反抗期って、自分の力がどれくらいなのかって試してる時期のような気がして。

井口：　うんうん。

田中：　だから、通用するかとか、そういったものを計ってる時期でもあるのかなって思います。

井口：　なるほどね。だから見守らないと、いかんな。と思いますね。

田中：　そうですね。（反抗期も）あまり深刻に受け止めてもない感じで（笑）

井口：　（笑）まぁ、もしね、何事かあったとしても、「おまえのオムツをどれだけ代えてやっ

たんだ」ってこと言ってやると（笑）

田中：　「おまえの弱みは握ってるぞ！」みたいな（笑）

井口：　「オムツ、しっかり代えてやったんだからな」とか、「俺が食べてたモノ、そのまんま食べさせてやってたんだからな」って（笑）

田中：　いい感じですね。

井口：　子どもとは、そういう関わりはしてますけどね（笑）。　子どもにいろんな教育をしてやったかというと、それはそうでもないですけど、順調に育ってくれてるかなって思いますね。

田中：　子育てとかって、種を蒔いてるみたいなもんかなって思って。その子の中から何が生れるのかわからないけど、親がいい種を蒔いてやるみたいな。

井口：　いい種、蒔いてるかなぁ（笑）。それはわかんないですけどね。

田中：　何が、こうそれぞれに植わってる感じ、します？

井口：　う～ん。まぁ、なんていうんだろうな。大切な、その「自分で考えて、自分で行動する」ということは、それはある程度備わってくれているとは信じてるんだけどね。受け身ではなく、自分で考える、行動するということは、完璧ではないけれど、ある程度はどっかで気づいて、動くのではなかろうかな、と。それが一番大事だと思ってるかな。自分で考えて、自分で行動する、常に。受け身じゃなくて。与えられるもの、指示されるのを待ってる。与えられるのを待ってる……じゃなくてね。

一番上がまだ小学校低学年くらいの頃に、それまでは結構頻繁に買い物とか行ってて、その時一番上が「なんか買ってよ」って毎回そうやっていうようになって、これはまずいなって思って。それで「なんか買って、はないだろう？」、「これがほしいから買ってならわかるけど」って指摘したことがあります。何か買ってもらうことで心を満たそうとしてると感じて、それはまずいな、と思いました。買い物はちょっとやめようということになって、キャンプ行ったりするようになりましたね～（笑）　振り返ってみると、「自分らも買い物に依存しているところがあったね」ということで、これはやめようってことになり、山へ行ったり、川へ行ったり、そういったところから変えていこうって。

田中：　うんうん。

井口：　そういったことやめてみたりしたこと、あったかな。

田中：　ポイント、ポイントってある気がしていて、それに気づかれてレールを修正したっていうところなのかなって感じがします。

井口：　うん。自分たちが敷いたレールの上を歩かせようなんて気持ちはないもんだから。とにかく「自分で考えて行動しなさいよ」って。だから「あなたは今、これが必要なのか？　必要じゃないのか？　それをしたいのか？　したくないのか？」ってことを常に考えてもらいたいと。こっちから先に「これしなさい」ってやっちゃうと、そこでもう与えられちゃう。それはよくないんだよって。でもそれをやりきれているかというと、そうでもないんですけどね。知らんうちにやっちゃってることあるんで。「これしなさいよって」って言って、あとで「あっ！」って（笑）

田中：　まず、気づかないと、ですよね。そういうこと、しちゃってるってことに。

井口：　そうですねー。

田中：　さっき、子どもさんが生まれた時に向きあい始めたっておっしゃってて、なんか一緒に作ってらっしゃる感じがします。

井口：　そうですよね。あんまり意識したことないですけどね。物を作ったり、そういうのはないですけど。工作も得意ではないですし（笑）。

田中：　なにか、内なるものの構築みたいな。

井口：　あー。うん。それができてればいいんですけどねー。

田中：　私も思ったんですけど、子どもを育ててく過程で、自分が大事にしているもの、知らないうちに行動している裏には価値観みたいなものがあって、その反映が行動だと思っているんです。だから、子育ての過程で、叱るということにしても、そういったものがいちいちあぶりだされるみたいな。

井口：　うんうん。

田中：　そういうことをすごく感じていて、自分が育ってきた過程で、完全な言語化ではないけど、なんとなく後でこうだったのかな、みたいなことを思い出すような。そんな時期だった気

がして。そうすると、それを観ることになる。
何気なく子どもに言った一言に、自分がはっとするとか。

・・・・・・つづく　^ ^

◆そして、自分を省みる

井口：　だからね、子どもと接すると、自分を省みることになる。

田中：　そうそうそう。

井口：　それができたのがやっぱ大きいかな、思ったんですよ。自己内省ってことですよね。自分の内を省みる。じゃあ自分は子どもにそう言葉を発したけど「自分、どうよ？」って（笑）

田中：　そうそう。自分に返ってくる。（笑）

井口：　無言のね、どっかから降ってきた言葉が。「あなたはどうなの？」って（笑）　ものすごくズドーンって響くっていうかね、そういうことはね、随所でありましたね。本読むようになってね。「梅原猛」って哲学者がすきで、あの人の本たくさん読んだんですけど、あの人どちらかというと、仏教哲学の人ですよね。だからあの人の言葉は心に響いて。

田中：　何かお好きな言葉はありますか？

井口：　好きな言葉……。その「人間は考える葦である」とか。人間って弱い存在だけど唯一考える能力を持った生きものであるから、挫折もいろんなこともあるけれど、考えようねっていう。考えるってことはすごく尊いことだし、大事なことだ、といわんとしてるのかな。自分なりに解釈すると。う～ん。とても自分の中で･･･。

田中：　こう、しっくりくる感じですか？

井口：　うん。しっくりくる感じですね。「我思う、故に我あり」とかね。まず自分。自分自身を大切に。お釈迦さんでも三千年以上前に、自分のことを大切に思えない人間が、それは自分勝手とかじゃなくて自分を大切に思う心。自分を大切に思えない人が、どうして他人の大切にしてるものだとか、他人の命を大切に思うことができようか、ということおっしゃってて。なるほどなあって。そうだよな、まず自分を大切に。「ご自愛下さい」って凄くいい言葉だなって思って。

田中：　たしかに。

井口：　若い頃はね、「なーに言ってやがる。そんな気取った言葉いいやがって」って思ってましたけど（笑）　「何がご自愛だー」なんて思ったことあったんですけど、実は実は、「ご自愛下さいね」という言葉の思いやり。

田中：　うん。その奥にあるものがね。

井口：　その奥にあるもの。凄くあったかくって、凄くいい言葉だなって。昔のそういう優しい言葉って非常にね、いい言葉だなぁって。

田中：　私も結構使いますね。

井口：　「まず自分を大切にしてね」って凄くいい言葉。でなきゃ、他人に対する気持ちなんて湧きません。秋葉原で起きた事件とか、世の中で起きてる殺人事件とか大体そうですね。やけくそになってる気持ちが自分に向かうか、他人に向かうかどうかだけだから、自分に向かう人は自殺するんだろうし、他人に向かうのは無差別殺人とかしちゃう。「五木寛之」だったか、自殺が増えると他殺が増えるというね。それ、わかるような気がするな。

田中：　そうですね。人を観る時であったりとか、なにかしらに関わる時の、ものさしってものがあるとしたら、それは自分だと思います。

井口：　うん。結局自分基準にしか物事を観ることしかできないですよね。

田中：　そうそうそう。

井口：　相手と比較対照するものって、物であったり人だったりだけど、結局基準っていうのは自分を基準にしてる。

田中：　そうそう。だから自分の中の大切なもの、命とか、人にされて嫌なことはしないとか、そういったものがないと相手を観る時もそういうふうに観るんだろうな、と。

井口：うんうん。

田中：　だから、自分を軽いっていうか。秋葉原系とか無差別の事件とか観ていると、自分を軽んじてる……命を。だから人の命も軽いって思うんだろうなって。

井口：　そうね。

田中：　でも今、そういったものを見つけるというか、さっき私は構築という言葉を使ったんですけど、積み上げていくもののような気がして。生きていく過程で、自分軸であったり。そういったことをしていない人が多い気がしているんです。

井口：　うん。

田中：　そうすると、手っ取り早く、周りのものさしを自分のものさしとしちゃう。

井口：　はい、はい。そういう人はどうしても流されちゃう。

田中：　そうそうそう。

井口：　そう、「フランクル」っていう心理学者の本。

田中：　「夜と霧」

井口：　そう！　あの本はすごく衝撃でしたね。あれは。

田中：　私も高校の時、読みました。

井口：　あの本を読んで、一節に、自分さえよければいいという囚人が、死にかけている囚人のパンをかすめ盗ったり、剥ぎとったり、そういう人間の方がかえって早く死んで、そんな極限状態にもかかわらず、夕日が沈むって時に仲間を呼んで「明日もあの夕日がみえるかなぁ」なんて、お互い共有して美しいものみようってしてる連中の方が長生きしてるっていうのには驚いたとかいうくだりを読んだ時に驚いたというか。「あー、凄いなぁ」って。やっぱり、人間いかに生きるべきか……ってその時、感じたんです。

あの本は読んでよかったなと思いました。あれはユダヤ人の視点からナチスとかみたわけではなくて、どちらかというとフェアな、心理学者としての視点で、ナチスが悪いって本ではないので。あれは凄い本だな、と。そこまで冷静に、あの状態の中であんなことが書けるんだと思った時、凄いなあと。

田中：　あれを同じ人間が、ああいう過酷な環境で、人間の尊厳を失わずに生き延びたっていうのがすごいです。

井口：　「じゃあ、自分がどうなの？」となった時、「自分はあんなふうに生きれないな」と思ったかな。やっぱり卑怯なことするのかな、とか。そういうふうに思って。想像するに、自分には耐えられないなぁと。想像できないですけど。

田中：　フランクルが言ってるのは、「希望を持っている人間は生き延びることができる」って

。じゃあ、希望が持てる人間ってどんなのかなって思うと。

井口：　希望を持つか、持たないか？

田中：　やはり自分軸のある人は、そういったことを振り返ることができるので、私はそれで、希望が持てるのかなと思いますね。自分の目の前の事だけではなくて、常に深いところに立ち返ることができるってことが。

井口：　そうですね。実は目にみえないものが幸せだったり、目の前にあるものに気づいていないことが幸せだったり、モノではなくてね。

田中：　それは思いますね。だからお釈迦さまであったり、雨の降るのをみて仏さまを感じることであたりとか、草が茂るのをみて生きるってことを感じたりとか、そういったことってあるのかなと思います。

・・・・・・　つづく　^ ^

◆葬儀の仕事の中で見えてくるもの

井口：　別に宗教について、イスラムがどうとか、キリストがどうのって、そんなこと別に思わないんですけど、やっぱり仕事柄、葬式の仕事をしていると、宗教はなんでもいいけど大切であると。ただ危害を加えるとか、金品を要求したりとか、そういうものがなければ何でもいいと思っているんですね、基本的に。あまりにもそういう意識が日本人少ないなぁと思っていて。それは宗教者が悪いのか、いろんな問題があるんだろうけど。

実際今世の中、自分がやっている仕事で捉えてみても、いろいろ情報がオープンになって、みんながみんな情報を持って、何が必要で何が必要でないか。何が大切で、大切じゃないのか、わかってきてはいる。だからあるべき姿ではあるのかな、と思ったりもしているし。また逆にぼくらのやってる業種、また宗教者……その膿。膿も同時に出てるってことなんだろうな、と。

田中：　膿？

井口：　そう。競争するものがないって独善的なところにどうしても向かいやすいと思うんです。自分らがやってることに何ら省みることもなくて、どんどんどんどん突き進んでしまう。宗教者もそうだしね。結局、葬式ってなんだ、仏教ってなんだっていわれるのもあるかなって思ったりすることもあって。

だからその自分が立ち返ったり、反省したりっていうものがないのは非常に危険だな、と。そういう意味で、ちょうど今狭間ではないかなぁと。膿がでて、情報がオープンになって、ちょうど潮流が入れ替わる時期なのではないかなぁと思ってますね。

結婚式がね、大きな結婚式場であげるっていうものから、個々の思いで結婚式や披露宴をするようになったじゃないですか。で、葬式の世界もだんだんそうなってきてるのかなって。やっぱそれぞれの思いで、結婚式も大きな所でやらなくても、自分らで教会で二人だけであげてくるから、お披露目会ねとか、海外行ってやってくるから、ガーデン・ウェディングね、レストラン・ウエディングとか、そういうのは一切なしとか。

いろんなそれぞれの思いで結婚式やってるのと同じで、葬式もだんだんそういう世界、個々のそういう思いでやっていく……。ただ残念なことに横とのつながりとか、地域のつながりとか、そういうものが希薄になるから、それが時として、いい場合と悪い場合があるのかなぁと思ったりしますけど。

でも、一応、そういう仕事としては、自分らの儲け、利益としては直接的に半減していく世界にはなって行くんだけど、自分らの仕事は儲けてなんぼ。ボランティアじゃないので、ちょっとは

儲けなければいけないんだけども、でもあるべき姿であるのかな……とも思ってるんでね。まあ方向性としてはいいんだろうな、とみてますけどね。仕事のことに関してはね。

自分らもそういう意味ではそれに対していかに対応していくかが求められている。ただそれが、そういった引き出しを今から持ってなきゃいけないんだけども、その引き出しをいくつも持ってやれるかっていうと、その自分のキャパシティとか当然ないわけで。やっぱり大きいところ、従業員いっぱい抱えているところにはかなわないのでね。自分の中でターゲットというか、絞り込んだ形でいかなくちゃいけないなと思ってますね。だから、うちらは花屋が前身なんで、やっぱり花。花のもたらす効果、それにいかなきゃもう仕方がないなと。それに付随したことでいかに、他にサービスが提供できるか、それしかないなと。

田中：　どんな引き出しがあればいいな、と思いますか？

井口：　結局、企画力というか、その企画に対して。例えば、みなさんそれぞれ趣味があるじゃないですか。その趣味に対して、それを、亡くなった人がこういう趣味でした。そういうのをプランニングしてあげられる。それを全て、さまざまな趣味を持っている人全てに対してできるかっていうと、なかなかそこまで演出はしてあげられないので。

でも、そのなかでも部分的に、亡くなった人が好きだったものを祭壇周りに置いて、飾ってあげましょうね、とか。自分たちのできることでやってあげるしかしょうがない。それを大々的にステージ設けて、例えば音楽が好きだったとしたら、その好きで作った音楽を演奏したり、できるかできないかわからないけど、まぁ自分たちでできることを、ってことですね。

だから、それを大きい会社だとすべてセッティングすることは可能かもしれないけれど、そこまでは人数も少ないですから、従業員数も。やれることでしかやれないですけども。相手がしてほしいことを。してほしいことの主であるものは何であるかを。それはいっぱい飾ってもらったから満足というわけでもないわけで。例えば、この人が大事にしていたものです、それを大事にしてあげることで、自分たちのできる範囲でやっていこうと思ってますね。全部が全部やってあげられると本当にいいんですけど。

田中：　自分の大切にしてるものを大切にしてもらうっていうのは、一番大事なことな気がします。

井口：　前あったのは、亡くなった人が絵を描いたり、字を書いたりするのが趣味で、書家というか。青山斎園でやった時に「花とか一切いりません」ということで「わかりました。それじゃあ、亡くなった方の趣味だったものを飾りましょうか」って言って、いっぱい飾ってあげたことありました。それで結果的にすごく喜ばれたし、それが故人を偲ぶってことで、親戚がきた時

に「これはあの時書いたものだよね」とか。そこでまた話がつながっていくんで、思い出を共有するってことができる場所になったかなと。だからこれはこれでよかったんだなと思って。

田中：　そうですよね。亡くなられた方を最期に囲む場でもあるわけですもんね。

・・・・・・　つづく　^ ^

◆葬儀の本質は亡くなった人と最後に向き合う場

井口： そうです！　葬式の本質はそれなんです。実際にみんな情報に流されちゃってててわからなくなってて。葬式の本質は、亡くなった人と遺された人が最期に向きあう場。会話する場ですよね。キャッチボールをする場。　「あの人あれすきだったよね」、「そういえば、こうしてほしいっていってたよね」お互いそれを話す、キャッチボールする場。好きだったものを飾ってあげる、それだけでも心のキャッチボールができるわけです。

それをなかなか気づいてあげられる余裕もなかったり、世の中に流されちゃったりすることもあります。葬式っていうのは祭壇を飾ってあげないと立派じゃないし、故人を立派に送ったことにならないでしょって思ってる人もたくさんいるんです。

こちらも「そんなことないですよって。祭壇っていうのは、葬儀屋が仕向けた儲ける手段だから。あんなものは歴史的にひも解いても戦後も、戦後、元々は地域で葬式をするために、地域で交流して祭壇飾って、葬式っていう儀式を執り行った。地域だけで対応するのは大変だから、それから葬儀屋が生れてね。葬儀屋は祭壇飾ってお金を儲けて。そういう歴史だからなんの根拠もないんですよ」ってお伝えするんです。

だから「祭壇を飾らないと立派な葬式をやれなかったなんて思う必要は全くないんですよ」ってね。もちろんぼくたちは儲けだから、それを百万円でやって下さいって言われれば嬉しいですよ。だけどやっぱりお互いにそれよりももっと大事なことは、お互いが納得する。お互いが気持ちよく、こちらも仕事させてもらって、無事に終わって送り出して「よかったわ」っていってもらえる、それが一番大事なんで。ぼくらも請求書をだすのに、相手の目も顔も見られずに「よろしくお願いします」なんて仕事ほど、嫌な仕事はない。

田中： 確かに。確かに。

井口： あるんですよ。過去にそういう仕事したことが、何度もね。相手の目も見られずに「すみません」って。「よろしくお願いします」って（笑）

田中： やましい感じがあるってことですか？

井口： うんうん。やっぱ仕事上失敗したりとか、そういうのがあったりとか。あるんですよ、やっぱり。汚い部分もあるんですよね。そういう仕事して儲けると。そういうのはやめたいなって思って。やっぱり相手の顔も見られずに仕事するのは嫌だし。とにかく相手がどうしたいのか、相手がしたくない葬式、してほしくないことは何かをまず引き出して、話をして、お互いが納得してその上で仕事する。それが一番大事だよなって思っています。

過去は結局競争することがないからそういうこと平気でしちゃうわけですよね。相手が欲してもないことを、こっちがどんどんお仕着せにしてやって、いざ葬式始まって、やったはいいけど「私はあんなこと望んでない」とか、「なんであれをやったの？」ってね。こっちが勝手にお金儲けのためにどんどん必要もないサービスをやっちゃった。でも相手は欲していなかった。

結局、請求書を出す時に相手の顔を見ることができずに「すみません」ってやらなければならなくなる。そんな仕事はしちゃダメだ。ましてやぼくらの会社はちっちゃいしね。個々で納得してもらって、お互い気持ちよく。それで仕事しないと明日がないなと。

田中： なんか凄く大切なことに気づかれたのかなぁと思いました。

井口： そう！　それに気付いたのが、結局、本読んだりした時期と凄くかぶるんですけど。子どもが小さくてとか、やっぱり１５年、１０年以上前ですね。その頃に気付いて。その頃にちょうど葬儀場がラッシュだったりとか、競争がどんどん激しくなってきた時期なんですよね。

その頃にうちは、今までよかったものがドーンと落ち込んだんです、仕事上で極端に。その時にいろんな経費というか設備投資していたもんで、それを返したりとか。借りてたもの返したり、いろんなもの返して身軽になったのね。そういうものに頼ってやってて。本体というか、自分たちの足場をしっかり固めないで、上を向いていてもキリがないって思って。本体が体力持ってないとだめだなって返しちゃって、身軽になってその分縮小して、結果・・従業員も減らしてしまいましたけれども……。

縮小はしたけども、そっから原点に戻る気持ちになれたし。自分の中ではとても清々しくて。そこで反省することもできたんです。今までの仕事は絶対良かったとは言えない。しかし、これからはちゃんと相手の目を見て打ち合せをして、最後も相手の目を見て「ありがとうございました」、向こうからも「ありがとうね」って言ってもらえたら、それは最高だよなって。

田中： お話し伺っていて、さっき亡くなられて、そのご家族の方に大事なものを、大切にされたものを提供するとか、してほしくないことを聞き取ってという、そういう作業と同じような感じがしました。余分なものをまず最初に落としてから、そうするといろいろかぶってたものがなくなると、本質ってとても見やすくなるのかなぁと思って。

井口： うんうん。そうですね。

田中： なんかそういう作業をされたのかな、と。

井口： そう、そうなんですよ。やっぱりまだまだ愛知県は冠婚葬祭が派手で、やっぱり、ありきなんですよ。建物ありき、祭壇ありきなんですよ、どうしても。それを崩したいですね。

田中： それを崩したい。

井口： うん。確かに金儲けにはなるけど、崩したいですね。祭壇がないと立派な葬式してあげられなかったとみなさん思ってるけど、違う。何にもなしでいいんですよ、と。

逆に考えてくださいね。葬儀に必要なものはなんですか？　火葬場の手配と、病院で亡くなったら病院からの引き取り、安置する場所、搬送、火葬場に向かうための車、亡くなられた方の、そのままのお姿では火葬を受け付けてもらえないので箱が必要になる、それが棺桶。要はものであれば、棺桶さえあれば葬式はできるわけですね。

だったら、あとはみなさんの気持ちひとつなんですよね。「これでいい。私たちはこれで立派に送ってあげられる」というのであればそれで完結してるんです。

だけど「これじゃぁ淋しいから。この人花が好きだったから」と思って花を飾ってあげたくなったら花飾ってとか。花は別に好きじゃない。ただ本が好き。なら、本を並べましょう。この人お酒が好き、ならコップに注いでそれでお別れしましょう。なんでもいい。

とにかく葬式というものは亡くなられた方と遺された方、また縁があってつながった人、それが最期に向きあう場だから、それがちゃんとできれば、きちんとキャッチボールできた時に、立派な葬式ができるんですよ。そう思わないとだめですよ。

あとは葬儀屋だとか、宗教者のことだから。ぼくらも仕事だからボランティアじゃないから、何にもなしより百万円の祭壇の方が嬉しい。だけど相手が欲していないのだったら無理強いする気はない。それが立派な葬式だとも思っていないから。これがベストといえるようにしたいな、と。それがどこの葬儀屋もやってないことだし、やっぱり儲け優先になっちゃうんです。それもわかる、気持ちもわかる、存続していかないといけないし。でも同じことしてたら、うちは生き残っていけない。

田中： 凄く力強い感じがしますね。もう方向性はしっかり決まっている。

井口： うん。自分の中で軸はできたなって。それがすごく清々しいです。確かに儲けたいという気持ちはまだある、だけどまず大事なのは、家族。家族が笑って過ごせる、それが大事。だからそれができるんであれば、いいんじゃないかと（笑）　極端な話、たまにおいしいもの食べたりできればいいんじゃないかと。ほしい服あったら買ったり、たまに旅行いったりすれば、別に一

年間豪華クルーズとかで世界一周とか夢見なければ（笑）　自分も仏教でいう少欲知足。

田中：　うん。足るを知る。

井口：　うん、足るを知るというか、それが大事だな、と。欲望には際限がない。この仕事で教えてもらってるんだけども、結局。世の中、教えなきゃいけない立場の宗教家も葬儀屋もわかってないな、と。あまり批判はしたくないけど、なんか逆行してる気がします。

高級車を乗り回したり、高額なお布施をもらって……。それは本来あるべき姿なのかなと。別に高級車乗ってもいいよ。誰だって欲はあるんだもん。その代わりというか……何か尊い活動をしてらっしゃるだろうか？　そうであれば高級車に乗ろうが何をしようがいいと思うんだけど、必ずしもそう感じることが少ないと思うと、ありがたくないわけです。だったら必要ない。

世の中、東京で三割以上が直葬。病院からもう直接火葬場に向かう。直接火葬場に行けなかったらワンクッション。葬儀場なり自宅なりで安置して翌日火葬。そこには宗教者は全くいない。自分たちのことだけ。もちろんいい宗教家もいるけど、尊い人もいますよ。でも残念なことに、そうじゃない人が目立つというか。先行してしまうとおかしなことになっちゃう。実に素晴らしい、尊い活動をしている宗教家もいる。が、悲しいかな、どうしてもそういう人が目立ってしまう。人が離れていっちゃう。

田中：　嘆かわしい感じですね。

井口：　本質とは別なところでみんな動いていっちゃう。宗教者、宗教って何のためにあるの……って。もう一遍考えないと。

田中：　井口さんは何のためにあると思いますか？

・・・・・・　つづく　^^

◆そして八百万の国、日本

井口： それは、やっぱり心の作用かなと思います。自分自身なんです。自分自身の中にそれは持ってなくっちゃいけないものだから。宗教はなんでもいいんです。

自分の心の拠りどころだから、自分が何かしようとした時に、この道は正しいのか、間違っているのか、その時に昔の人でいえば「神さまがみてるよ」とか「仏さんがみてるよ、そんなことしていいの？」ってね。

どっかで、抑止力になったりだとか、背中を押してくれたりとか。いじめられていても「大丈夫。おまえはひとりじゃないよ」とか。そういう心の拠りどころとして、常に宗教があればいい。あるべきだと。阿弥陀さまとか、あれはたまたまで。大昔、情報は何もない。やっぱそんな中ですがるものがない。すがるものがないから偶像的なものですがらせてあげないと、一般の庶民は救われないだろうな、ということでああいうものが生れたと思っている。

だから、それが嘘だとか、本当だとか、そんなことはどうでもよくて、何でも真実じゃないといけないのかなと。すべて真実じゃないといけないという世界になってきたことによって、おかしなことになっていると感じています。

田中：　そうですね。

井口：　目に見えるものしか信じないよ、という人たちが増えることによって、心っていうものが荒んでいってるのかなぁと感じなくもないんですね。ぼくは宗教は大事だと思っている。でも、大事だけども、この宗教しかだめだとか一元的なことはよくないとも思っている。イスラムとかキリストとか宗教戦争してますけど、やはり一元的。自分たちの宗教しか信じない。日本は何がいいかっていうと、元々神の国。八百万（やおよろず）の、山にも川にも。

田中： 全てに神が宿る。

井口： そう。全てにね。その姿勢が仏を受け入れ、いろんな宗教を受け入れたわけだし。日本はとてもいい国だと思う。日本を愛す気持ちも必要だし、日本人でよかったと思ってるし。そういうことがいろんなとこでつながるんですよ。宗教もそう。道徳、教育もそう。うまいこと説明できないんだけど、宗教も必要だし。教育も必要だし。日本人として、日本特有のそういう価値観。それはものすごくいいことだし、必要だと思ってますね。

田中： 日本って、キャパシティが大きい気がするんです、凄く。

井口： うん。

田中： 凄くいろんなものを。

井口： そう。日本は凄く寛容な国ですよね。先日のWBC（ワールドベース ボールクラシック）の台湾戦の話もだけど。魚心あれば水心。相手に好意でもって接すれば、相手も好意でもって返してくれる。これってもの凄くいい言葉だし、いいことだと思うし。中国もどこそこの国の人もよくみろよって（笑）

田中： そうですよね。

井口： 日本人って昔から寛容な心を持っていると思ってるんですよね。

田中： そうですよね。私も古き良き日本人っていうのを、私も時々考えるんですけど、ゆったりとしてるんですけど、一本筋が通っている気がするんです。受け入れるんだけど、自分の中に譲れないものも持ってる。凛としたものを持ってる、そんなイメージがあって。それが全てに現れているような気がして、日本の昔の家であったりとか、すごく合理的。足るを知る。そういったものもありつつ、懐が深い。だから、私は和室とかすきで。物がない。だけどそこに一輪の花があって、侘び寂びの世界とかね。季節によって掛け軸がかわるとか、お花が一輪かわる、それがポイントとしてすごく効くっていう。

井口： そうですね。あれはほんと、心の現れですよね。あの侘び寂びとか、一輪の花とか、すべて心ですね。心をうつしてる。あれが花にかわっただけで。日本人独特の、特有の文化というか。あれは西洋にはないですね。西洋はてんこ盛りですもんね。大盛り。

田中： てんこ盛りなんですよ。もうカラフル。

井口： モネの世界ですから。

田中： そうそう。いろんな色が重なって。

井口： そう。いろんな色がひろがって、百花繚乱じゃないけど「ほら、素敵でしょ？　みてー。もうきらびやかでー」

田中： こう目を引く感じですけど、日本の美っていうのは、こう何気なく目をとめた時に、みえる、みたいな。

井口： そうね。それでまた心の作用だったりするんで。それはその人それぞれで、心のあり方をうつしている。心に感じる。琴線に触れるっていうか。そういうものですよね。だから古（いにしえ）の歌読んだりする人たちは、花と自分の人生をなぞらえたりとか。

田中： そうそう。だから、八百万（やおよろず）で、すべてに神が宿るっていうのを考えていくと、すべてが尊い感じがして、粗末にできない。

井口： うん。そうですね。そういうことを感じることは非常に大事じゃないかなと思います。自分もそういうことに気づかされた。自分も教育の中で、道徳教育も宗教教育も受けてない。海外旅行に行けば自分は無宗教と答えていた自分がいたわけなんで。それって恐ろしいことだなと思って。

神も仏もない、自分が自分の思うがまま、自分の勝手、自分の感じるまま。俺あいつ気に入らないから殺したんだ。関係ないよね、神も仏もないからって。それは非常に危険なことだなって。やっぱり神さまが見てるよとか、凄く大事だなって。

田中： そうですよね。今そういう、神さまが見てるよっていう感覚を持っている人って少ない気がします。

井口： そういったところで、「何をバカなこと言ってんの？」となっちゃう。神なんて、いないじゃん。結局、目に見えないものは現実じゃない、そんなものはない。それがあるかないかってっていったらない。非常に怖いね。幽霊なんかいない。目に見えないものを恐れる。そういう意識ってもの凄く大事だなって思っています。

目に見えないものを想像する、その想像力がいかに大事か。今、東日本で起きたような大津波が、やっぱりあれも目に見えないものしか信じないから、みんなそこまで想像できない。もちろん、誰もあそこまでの津波は想像つかなかったのだけれどね。でもどこかにこう野生の本能とか、危機感とか、どこかで呼び覚まさないと、覚醒しないと。

田中： そうですね。

井口： 結局、目に見えてるものしか信じないっていう。

田中： インディアンの話の本を読んだんですが、神はそれぞれにあって。それは精霊であったりとか。ネイティブのインディアンの人たちは、そういう神の存在というものを感じていて。でも最近は、そういう感覚が鈍ってはいるらしいんですけど。二、三代前のインディアンの方っていうのは、自分が亡くなる一週間前くらいになるとわかるんですって。

井口： へぇ。

田中： それで、そういう啓示がくると、自分の持ち物を全て先に渡しちゃう。形見分け。

井口： ほぉ……はい、はい。

田中： 物は元々少ないから、分かち合いなんですよね。自分はもう死んじゃうから、代わりに使ってくれっていう感じで、毛布であったり、カップであったりとみんなに配っちゃうんですって。で、それからほんとに一週間以内とかに召されちゃう。その感覚っていうものが、残ってる。だから、生れる時もひとりだけど、亡くなる時も身体ひとつって。今、井口さんがおっしゃった動物的なもの。野生の動物とか、飼ってる猫とかでも自分の死期を悟ると家から消えるってこともあるし。

井口： そうね。

田中： そういったものなのかなって。

井口： 凄く大事なもの。

田中： だから、変ないい方かもしれないけど、病気とかで余命を宣告されることとかって、とてもつらいと思うんですけど、考えた時に、これちょっと友人と話してたんですけど、逆に準備ができる期間があるってありがたいかもしれないねって。

・・・・・・

つづく　^ ^

◆人生の終着点は「死」

井口： そうだね。それはある意味賛成ですね。後は延命行為もしない方がいい。これ話したかどうかわからないけど、ホスピスの話。
ホスピスで最期を迎えられる方、取り巻く家族、ものすごく清々しいんですよ。亡くなった後でも笑ってるんですよ、みんながみんな。もちろん、悲しんだけども、亡くなった人も本望だし、そうしてもらえて。家族の方も思い通りのことをしたし、してあげられたと思ってるし。ものすごくお互いがいい空気。ほんとにちゃんと向きあったよっていうのが前面に出ているから、私たちこの人が亡くなるまでちゃんと向きあって過ごしましたって。凄く清々しい。もう晴れ晴れとしてるんです。

田中： 行ってらっしゃいって感じ。

井口： うん、最初行った時に「なんじゃ、この世界は」と思った。「あんたら、それでも人間か？」ってね。「そんなへらへら笑って。人が死んでるのにさ」ってね。

田中： うんうん。

井口： でも、いろいろお話をしたり、たった一日二日間の葬式が終わるまでのお付き合いの中で接する中で、何かこうしっくりこなかった……自分の思いとね。「なんだろうな、これ」みたいな。「なんか違うよな」自分が思ってることと違う。この人、別に憎んでたわけじゃない。死んでせいせいしたって感じでもないし、だけど、にこやかで。「なんなんだ、この世界観は？」と。
それから、いろいろ考えて、いろいろ接した中で「ああ、そういうことかぁ。ちゃんと向きあったんだ、この人たちは」と。「だから、ちゃんと死をみつめて、自分たちは生きる、先のこともみつめているから、こんなに清々しいんだ」と思った時に「これはいいことなんだな」と思って。
その時に思いましたね。自分もこういう仕事してて、自分もいつか死ぬ。明日は死なないと思ってはいるんだけど。いつか死ぬって思った時に、極端なこというと「人間は向かうところ、死だな」と。はっきり言っちゃうと「目標は、死」なんだなって。
一見思うんだけど、でもそれを絶望的な気持ちの中でずっと、「結局は死ぬんじゃん」と思っていたとしても、ずっと向こう、今度は、その先には、生きる。「だから、生きなきゃ」ってことなんだなと。そう気づくと、はっとして「そうかぁ」と思って。「なるほど。死をみつめるってことは、やっぱり悪いことじゃない」、「人間はみな死をみつめなきゃ、だめなんだなぁ」と。自己肯定的な話になってしまったけど、そういうことに気づいた時に「よかった」と思う。

田中： メメントモリ「死を憶（おも）え」

井口： ちゃんと死をみつめる、向きあった人は、さっきのインディアンの話ではないけど「身ぎれいなんだな」と。葬式してても身ぎれいな人っていうのは、自分が命あるうちに遺産のことから全て整理して、後の人が困らないように言い渡して「私が亡くなった後は、こうしなさい」と全部したためて死んで行ってる。なかなかそんなことできないんだけれども、ごくわずかな人なんだけど、たまにそういう身ぎれいな人がいるんだって、凄いよなぁって。ちゃんと死に向きあって、生きるってことを大切にして、みつめて、また自分とつながった人達のこともみている。だから命のつながりを大切にして生きるってことをちゃんと考えてる。そういうことを感じた時に、凄く感動しますね。
ほんとに清々しいというか、混じり気がない感じがして。だけど、みんな亡くなったら、終わりっていうけども、リアリストたちはそういうけども「亡くなったら終わりじゃん。灰になるだけじゃん」ていうけども、そうじゃない。　「心の中でちゃんと生きるでしょ。それが宗教でしょ」って。結局亡くなった人との思い出、それが一番大事なわけで「自分の死ぬ時に何を持って死ねるだろうか？」ってことで。まだ想像でしかないんだけどね。お金を持って行けるわけじゃないし、今趣味でやってる楽器も持って行けない、もちろん、車も。じゃ、何持って行けるのかというと、思い出だけじゃんってことになる。自分がよかった思い出、それを胸に。死ぬ時に持てる、それほど幸せなことはない。思い出はつながる。これは遺った者にも思い出はつながる。遺された者は次世代の人と思い出を共有することによって、それがつながっていく。「それが遺伝子だろう？」と。遺伝子の大切さなんだろうと。だから、自殺なんかしちゃいけない。人はつながって生きている。そういった、いろんなことがつながっていくと「そうか、そうか」と。

田中： 脈々と、つながっていく感じですよね。

井口： そう、脈々と。命のことを考えると「死はちゃんとみつめなきゃだめだな」と思いますね。なんか委員会みたいな話になりましたね（笑）

田中： でも、それがコアな部分ていうのかな。それがある人とない人では違う気がするんですよね。死って終着点かもしれないけど、そこから今を観た時に、はじめて観えるものがある、気づくことがある。

井口： うんうん。

田中： だから、人間って死が与えられているんだろうなって思うんです。それも、なぜ寿命が知らされてないか？ということも意味があるような気がするし。

井口： そうですよね。

田中： 逆に「あなたは幾つで死にますよ」っていうのが知らされていたとしたら、すごく刹那的になる気がします。

井口： そうですね。

田中： 「どうせ、終わるんだし」みたいに。今と違う刹那的になると思うんですよね。今は死を観ようとしてしてなくて、目を背けて享楽的な感じがするんだけど、逆に寿命が限られている、ここで命が終わるっていうのがわかると、そういう自分の時期、位置がわかるというか。その今おっしゃった、大事なものに気付くために、寿命というものが知らされてないのかなぁと思います。

井口： うん。そうかもしれないですね。だから、逆に「人間は生かされている」ってことに気づくかもしれないし、気づかなきゃいけないのかも知れないと思いますよね。

田中： そういったものに気付いた時点で、謙虚になれる自分がいる。「お天道さまがみてる」とか「生きてるのは偶然じゃない」とか。

井口： だから科学文明っていうのは非常にいいことなんだけど、全てが科学文明で処理されてしまうと、人間おかしなことになっちゃうのかな、と思いますね。

田中： そうですね。バランスのような気もします。今はとても目に見えるものが多くて、器はあるんだけど、それを満たしている物がない感じがします。

井口： そうですね。

田中： そういったものは、よそからではなく、その人がみつけていかないといけないものだから。

井口： それは、やっぱり自分の考えとかね。自分で思う、自分の目でみて、自分で考えて行動する。それはほんと大切ですね。

田中： 今日はどうもありがとうございました。
.
井口： ……こういったお話なんですか？（笑）

田中： はい。その時によって変わってくるんで（笑）　でも、お仕事につながるお話だと思う

ので。

井口： そうですね。最初は子どもの話だったんですけど。

田中： 「死生観」っていうのは、とても反映すると思うんですよ。

井口： はい。とっても大事なことだと思いますね。あの一、逆にマイナスに作用してしまうことも十分あり得ることなんですけど。死生観は無常観につながりやすいからね。「自分のやってることが泡と消えちゃうじゃん」とかになってしまいがちなんだけど、すべてそういうふうに考えてしまうと、実はマイナスで……。そうじゃない、その奥にもっとあるものをみつめると、実は違うってことなんですよね。

田中： ですよね。そういったものに気づかせてくれるものが、宗教なのかもしれませんね。

井口： そういうことなんですね。

田中： 生かされてるから、生きなきゃ、みたいな。

井口： そうですね。

田中： 寿命が与えられているうちは、生きなきゃっていうのもってあるかもしれないですね。

井口： いつかは死ぬ自分だから、大切に。周り大切に、自分大切にしなければ、という気持ちを少しでも持ちなさいよ。と教えてくれているような気がしますしね。

・・・・・・　つづく ^^

オマケノページ

こちら、好奇心でかきだした質問表 です ^ ^

井口さんにもインタビュー後おつきあい いただきました。
まずは どうぞ、みなさんもたのしんでくださいませ★★

＜いろいろ質問表＞
・月並みですが、小さい頃はどんなこどもでしたか
・好きな本を一冊選んでください
・いつも必ずする「習慣」はありますか
・ねこ派ですか？いぬ派ですか
・今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか
・それのどの部分が大変だと感じたのでしょう
・それをどうやって乗り越えたんですか
・その時、大切にしていたことは何ですか
・今頭の中にうかんでいる人はだれですか
・その人は、何か言っていますか
・３つ願いが叶うとしたら、何を願いますか
・人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか
・人として、これは譲れないっしょ？？っていうのがあるとしたら、何ですか
・RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか
・因みにそのなかで、あなたの役割（キャラ）はなんですか
・それはどんな冒険になるのでしょう
・「攻め」と「守り」自分はどちらだと思いますか
・全く何の制約もないとしたら、何をしますか
・聞くとムカッってくる言葉ってありますか
・どんな時にイラッとしますか
・落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか
・何をしている時が一番たのしいと感じますか
・今一番欲しいものは何ですか
・あなたの萌えポイントをおしえて下さい
・今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、２つ語って下さい
・そこで何に気付きましたか
・今の自分を突き動かしているものは、何だと思いますか
・今死んでも悔いはありませんか
・身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか

・世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか
・生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか
・人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか
・朝起きたら、雨が降っていました、どんなことを思いますか
・世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか
・自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、おしえてください
・自分のキャラを一言でいうなら
・今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか
・今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください
・一年後、どんな自分でいるでしょうか
・最後に何か一言お願いします＾＾

・・・・・・　つづきは井口さんのおこたえデス＾＾

田中： いくつかお伺いしたいことを準備してきたんですけど。

井口： いっぱい書いてありますね（笑）

田中： 何に答えたい感じですか？（笑）

井口： じゃぁ、ひとつずつ答えていきましょうか？

田中： ありがとうございます^^
月並みですが、小さい頃はどんな子供でしたか。

井口： 泣き虫で、嘘つきで、勉強嫌いで、遊ぶことしか考えていない子でしたね。

田中: すきな本を一冊選んでください。

井口:「歎異抄」ですね。

田中： ねこ派ですか、犬派ですか。

井口： 犬派ですね。

田中： 今までで一番大変だと感じた出来事は何でしたか？それのどの部分が大変だったのでしょう。

井口： 大変かぁ。なんだろうなぁ？　自分が高校を退学しなきゃいけないかもと思った時だな。

田中： （爆笑）何をしたんですか？

井口： （笑）いや、中退しないといけないような事件を起こしてしまった。

田中： ワルだったんですか？

井口： ワルというか、学校で喧嘩して、先生に暴言を吐いて、それで停学処分受けて。で、「退学するか？」っていうところまでいったんですけど。

田中： それのどの部分が大変だと感じたのでしょう。

井口： その部分のどこが大変？　う～ん。退学するかどうかってってとこで。

田中： では、それをどうやって乗り越えたんですか。

井口： どうやって乗り越えた？？　みなさんに謝った（爆）親戚にも。

田中： 頭を下げてまわった？（笑）
　　その時、大切にしていたことは何ですか。

井口： 何もなかった気がするけど、友達は大切にしてた。友達によって救われたこともありましたね。

田中： 人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか。

井口： 目、かな。

田中： 人として「これは譲れないでしょう」 というものがあるとしたら、何ですか。

井口： これは自分のこと？

田中： こういうところがある人とはつきあえないってことかな。

井口： ああ、打算的な人。簡単に言えば。常に相手から何か、自分の利益になることしか考えてない人とか。自分の本音をいわない人。本音を語らない人。常に上っ面の部分でつきあってる人。もちろんすべてを本音でぶつかるって大変なんで、なかなかそうはいかない部分もあるんだけど。ただ上っ面だけだと、こっちもそうなっちゃうけどね。やっぱり、どっか芯が、核心にふれる部分が、つきあいの中でないと醒めてくし、離れていく。

田中： 「攻め」と「守り」自分はどちらだと思いますか。

井口： 守りですね。

田中：　全く何の制約もないとしたら、何をしますか。

井口：　音楽やってるかな。

田中：　ロックな感じですよね。
　　聞くとムカッってくる言葉ってありますか。

井口：　あるんだけど、今思い浮かばないな。すぐ忘れちゃうんですよ。確かにいっぱいあるにはあるんですけど。上からしゃべってくる言葉、相手の気持ちをいかにも見下してとか、馬鹿にしてるのを感じた時はムカッときますね。

田中：　どんな時にイラッとしますか。

井口：　これは自分ですか？　相手ですか？

田中：　自分ですね。

井口：　優柔不断な態度をとった時ですね、自分自身が。はっきり決めれなかった時。

田中：　落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか。

井口：　これは、音楽やってるんで。　自分の趣味ですね。

田中：　何をしている時が一番たのしいと感じますか。

井口：　音楽ですねー。

田中：　テンション上がる感じですね（笑）
　　今一番欲しいものは何ですか。

井口：　物でいうといっぱいありすぎて、キリがない。とりあえず、ない。

・・・・・・・　つづく　^
^

田中：　今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、２つ語って下さい。

井口：　これは子どもですね。子どもとの出会い。後は、子どもとリンクして本との出会いですね。これが自分にとって大きな転換期になったと思いますね。本と子どもは非常に大きかったですね。

田中：　そこで何に気づきましたか。

井口：　自分の汚い部分に、もの凄く気づきましたね。それがすべて整理されたかっていうと、されてないですけど。まぁ　「自分が存在していいんだよ」ってことも教えてもらえたんで。いろんな意味で反省と、励ましと、自分の人間としての弱さ、小さな自分。そんなものに気づかされて、よかったかな、と思いますね。

田中：　私NLPなどをやっていて、そのトレーナーの方もおっしゃってたんですけど「人間って一番見せたくないもの、どろどろしている部分をだして、それを受け入れられた時、一番癒される。」って。

井口：　ああ、まさに。ぼくも自分の弱さだとか、醜さだとかに気づかされて、本とか通じて気づいた時に、涙が止まらなかったな、その時。その後に、本が語るわけじゃないけども「あなた、存在してていいんだよ」っていわれたような気がした時に救われた気がしましたね。どちらかといえば、自分はおってもおらんでもいい存在ぐらいに思ってたんで。そんなことがあって非常によかったな、と思いました。

田中：　今の自分を突き動かしているものは、何だと思いますか。

井口：　何なんでしょうね。目に見えない力が働いているとしか思えない。ただ、思うのは「やっぱ、生かされてる」かな。自分は生かされてるから、まわりを大切にしよう、とかね。いろんなことを大切にしたいなと思っています。

田中：　なんか、すごい静かな感じがします。こう「ガシガシ開拓してくぞー」っていうものではなくて。

井口：　あー

田中：　スムーズにね。動いていらっしゃるような。

井口：　ぼくに今そのパワーはないんですよね。いますよね、ガシガシ意欲的にギラギラさせて

開拓して仕事を自分の方に持ってきてる人ってすごいなあ・・って。ぼくはぼくのスタンスで、今できることを考えて動くしかできない。そこまでがむしゃらにっていうのがないから、ほんと静かに、今できること。

田中：　今死んでも悔いはありませんか。

井口：　悔い、あるなぁ。これは死ぬ間際でも悔いはあるかもしれないなぁ。

田中：　身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一ヶ月だとしたら、何をしますか。

井口：　後一ヶ月かぁ。何するだろう？　まぁ、物は買わないですね。それは明らかですね。物は買わないけど、思い出作りになることしたいな、と思いますね。それが旅に出るのか、家族となにか共有するものなのか。それはわかんないけど、具体的になにするのかわからないけど、心に作用するもの。やはり思い出ですね。最期死ぬ間際に持って行けるもの。そのための一ヶ月ですよね。

田中：　世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか。

井口：曹洞宗の開祖の道元禅師が、「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪冴えて涼しかりけり」って言葉があるんですけど、この四季の言葉の中にいろいろ凝縮されてて。例えばくよくよ悩んでいる人間がいるとしたら「その世界に身を投じてみよ。」と。「いかに自分がちっぽけな人間かと。くよくよしていることがばかばかしく思えてくるはずだ」、「宇宙の中に自分をさらけ出せ」、「いかにちっぽけか。自分が生かされているか。それがわかれば明日から、また生きていけるはずだ」、「地球には美しい季節があって、それを愛でる気持ちが生まれれば、生きるに値するはずだ」と。素晴らしいな、と。まさに演説するとしたら。

田中：　それを朗読する感じですか。

井口：　ですね。お釈迦さんが最期にいった言葉「この世は美しい」、「この世は汚辱にまみれておる」と最初の頃そういっていたお釈迦さんとは全く違って。「汚いもきれいもあって、やっぱり美しいがあるだなぁ」と。

田中：　削ぎ落としたからこそ、観えるものってある気がします。

井口：　そうね。汚い世界とか、朽ちる世界、朽ちるものをみて、尊さを。花でもそうですが「荒木経惟」が腐った花の写真を撮ったりするんですけど。あれってすごいなって。あの人の枯れた花の写真は、もの凄く心に響く。この人汚い写真をいっぱい撮るんですよね、新宿歌舞伎町の

朝方とか。ゴミが散らかってる。でも、あそこにはすごい生命が感じられるんですよね。

田中：　ひとつのものではなくて、雑多なもので成立してますからね、世の中って。

井口：　そうなんですよね。ちょっと思いました。

田中：　生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか。

井口：　女の人かなぁ。わかんないなぁ。女の人は女の人の辛さもあるか。なんともいえないですけど、ぼくの中では、女の人って宇宙というか、生命体だと思ってるので。お腹の中で十月十日（とつきとおか）で、人類創世が凝縮されてるわけじゃないですか。すごいことです。何十億の人類の歴史が凝縮されちゃってる。宇宙ですよね。お腹の中で、生命の歴史が起きてる。やっぱ、女の人にはかなわんな、と思いますもんね。だからといって、女の方が偉いって思われたくないんですけども。あの出産っていうものは、男の人が経験したら死んじゃうって、わかる気がします。男は血をみてすぐひるんじゃうけど、女の人はそんなことないですしね。女の人は生命の源だから。

田中：　強さっていうのも、役割っていうのも、種類が違うんですよね。

井口：　それをお互い認めあえる環境が、尊重しあえる環境があると理想ですよね。

田中：　世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか。

井口：　う〜〜ん、原発か。

田中：　自分のキャラを一言でいうなら？

井口：　楽観主義者ですね。

田中：　今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか。

井口：　心なのかな。

田中：　今日のこの時間で、なにか気づいたことはあったら教えてください。

井口：　改めて心のあり方、大切さを。ただ人とのつながったもの、それは大事にしたいですね。

田中：　インタビューは以上です。今日はお忙しいところ本当にありがとうございました！

井口：　こちらこそ、ありがとうございました！

＜予告＞　次回ご登場いただくのは　「白星舎」の 鈴木浩さんです ^ ^

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

今回、あなたの心の内側では、どのような気づきがありましたか。
少しでもみなさまのお役に立てましたら幸いです。

さて、私にはこのインタビュー記事の電子書籍出版のほかに、
『コーチング』という専門職の顔も持っています。
実は、今お読みになられたインタビューそのものも、このコーチングの考え方に則って行っています。

コーチングとは、人材開発のための手法のひとつで、
おもに対話によって相手の自己実現や目標達成を図る体系的な技術のことです。

相手の話を聴き、感じたことを伝えて承認し、相手に適切な質問をすることで、
クライアントの自発的な行動を促していくことができます。

日本にはいくつかのコーチングスクールがあります。私はCTIというコーチングスクールでCPCC（Certified Professional Co-Active Coach）という国際資格を取得しています。現在、日本では約４００名のコーチが、
このCPCCを取得しており、世界中では４,５００人のコーチがこの資格を持って活躍しています。

また、『人間の脳の取り扱い説明書』とも称される実践心理学　『NLP（神経言語プログラム）』　も学び、
米国NLP協会認定トレーナーアソシエイトの国際資格も取得しています。
このNLPとコーチングはとても親和性が高く、相互に相乗効果を発揮して、クライアント様の変化変容、
目標実現に大きく寄与していると評価を頂戴しています。

その他、ソースワークショップトレーナーの資格も取得しており、クライアント様に
　「本当に生き甲斐のある人生とは何か」　を見定めていただくためのサポートもさせていただいております。

しばらく新規クライアント様の募集は諸事情によりおやすみをさせていただいておりましたが、

このたび、また新規クライアント様の募集を再開させていただくことになりました。

もし、少しでもご興味やご関心がおありでしたら、無料体験コーチングを受講なさってみませんか。
今なら１回６０分のコーチングセッションを無料でお受けしております。

これまでも、たくさんの経営者様、事業家様、サラリーマンの方、もちろん主婦の方々までコーチングをさせていただきました。　柔軟なアプローチと揺るぎない信頼関係。　これが私のコーチングのスタイルです。

あなたの目標達成はもちろん、日常生活でのメンタル調整に、思考や判断の整理に、コーチングやNLPは素晴らしい効果を発揮します。　私にあなたのサポートをさせていただけるのであれば、これに優る喜びはありません。　あなたからのお問い合わせを心からお待ちしています。

無料コーチングセッション、その他のお問い合わせはお気軽にこちらから。

＜　ace-support@samba.ocn.ne.jp　＞

最後までお読みいただきましてまことにありがとうございました。

ハタラクヒトペディア電子出版
記者兼編集長　田中永子

ハタラクヒト＊ペディア　1 < 井口恭行氏 >

http://p.booklog.jp/book/71202

著者：田中永子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/24riko/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/71202

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/71202

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ